多彩にゼミナール活動

理論と実践力磨き、学びの成果発信

調査・討論・発表する中で、自ら課題を見つけ、解決する力を身につけることができるゼミナール。先生や学生同士、密接にかかわることでコミュニケーション能力や、プレゼンテーション力も高められる。このページでは、学んだ成果を学外に発信した活動を紹介する。

文・川上　隆志ゼミ

雑誌づくりのすべてを実践
『SHOW』第5号完成

▲　『SHOW』第5号を編集した川上ゼミのみなさん

川上隆志ゼミ（文学部日本文学文化学科）は、雑誌『SHOW』第5号を刊行した。

元岩波書店編集者である川上教授の指導で雑誌作りの基本を学び、企画、構成、取材、原稿書き、撮影、DTPによる誌面製作、校正など、刊行までの一連の作業を行う。A4判・128ページ（うちグラビア16ページ）。第5号のテーマは「世代差を埋める」。インタビュー記事をふんだんに載せ、「各世代間に横たわるギャップやつながりを、大学生の視点で解釈しました」と編集長の佐藤圭さん（3年次）。

大学生の視点生かし
多彩なインタビュー

直木賞作家で本学の創立者をモデルにした小説『蒼翼の獅子たち』の志茂田景樹さん、芥川賞作家の川上未映子さんをはじめさまざまなジャンルの人たちに話を聞いた。

スカイツリー建設にわく台東区押上1丁目の「まちをつくる会」の人々と一緒に、夏祭りにみこしをかつぎ、懇親会を共にして取材したことも。

少子化、虐待、待機児童問題など育児にかかわる分野も取り上げた。

昨年はサッカーワールドカップの年。スポーツジャーナリストの中西哲生さんにインタビューし、南アフリカ大会の総括も行った。

多くの人たちのさまざまな思いが、分厚い雑誌の中にふんだんに詰め込まれている。

4月初旬にテーマを決め、夏休みの間に取材、インタビューをし、9月から編集ソフト「インデザイン」で誌面作り。11月下旬に印刷会社に入稿。12月初旬に校了。メンバーは入稿前や校了時は徹夜作業にもなった。それだけに出来上がった時の喜びはひとしおだ。

今号は校正ミスによる誤植をなるべく減らそうと、大手出版社の編集者を講師に招いて勉強会を開いた。「ミスはずいぶん減りました。次年度は、レイアウトや見出しを工夫し、大勢に読まれる充実した雑誌にしたい。ノウハウを後輩たちに受け継いでいくことが大事だと感じています」と佐藤編集長。

川上教授は「それぞれの記事は企画から取材までよく練られ、書きこまれているが、全体の流れのまとまりが悪いのが残念。レイアウトやカラーの使い方などに工夫が必要」と指摘している。

川上ゼミは雑誌編集の延長として、大学生が発信する国際情報番組であるNHK・BS1「@キャンパス」に取り組んでおり、3月に放映予定。

『SHOW』第5号希望者は、生田キャンパス10号館の川上隆志研究室へ。

他大学生と共に活動　経営・石崎　徹ゼミ

1000人アンケート実施
広告代理店の指導で分析、考察

▲　右から石崎教授、竹見さん、松原さん、中村さん

「広告戦略研究」について学ぶ経営学部・石崎徹ゼミの松原大昂さん、竹見航平さん、中村美怜さん（いずれも3年次）が、首都圏の6大学（＊）でマーケティングを学ぶ学生による「第16回大学生意識調査プロジェクト（FUTURE 2010）」（主催＝㈳東京広告協会）に参加し、他大学の学生とともに活動に取り組んだ。

同プロジェクトは大学生約1000人にアンケートを実施し、広告代理店・博報堂のスタッフの指導を受けながら、分析、考察を行い、12月にプレゼンテーションを展開する。

今回は「大学生1000人にきいた『SNS』に関する意識調査」をテーマに、mixiに代表されるSNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）の利用実態を調査。その結果を「これからの『キズナ』の話をしよう」と題した報告書にまとめた。

12月6日に、東京・電通銀座ビルで記者発表会を開催。「現在の大学生は友人とのコミュニケーションツールの一つとしてSNSを活用しており、メールと併用することで現実のキズナを拡張、強化している」と、活動の成果を報告した。

発表会を終え、参加した3人からは以下のような感想が寄せられた。

「専大という枠を越えて活動することで、広い視野で物事を捉えることができました。チームの仲間と意見を交わすなかで、考え抜く力が身につきました。メンバーだけでなく、博報堂の方々とプロジェクトを進めることで学び、成長を実感することができました。この縁を大事にし、今後はここで学んだことを社会に出て発信していきたいです」（松原さん）。

「徹夜続きの日もありましたが、メンバー一人ひとりの助け合いで成し遂げられたと思います。一番良く耳にした言葉が『ありがとう』です。頑張りに対し、声を掛けられるだけで、気持ちを奮い立たせることができました。チームが活動する上で、感謝の気持ちを伝える大切さを学びました。この8カ月間は忘れられない、貴重な時間となりました」（竹見さん）。

「大変だったのは合宿です。調査結果を元に、ロジックチャートを用いて事実→解釈→主張と考えを進めていきました。その結果をこうして発表することができ、すばらしいものを作り上げたという実感がわきました。また、他大学の人たちと一丸となったことで、新しいきずながができました」（中村さん）。

＊専修、駒澤、上智、成蹊、東洋、早稲田の6大学

第7回神奈川チャレンジプログラム
本学から最多の64チームがエントリー

㈳神奈川経済同友会が主催する「第7回神奈川産学チャレンジプログラム」の表彰式が12月14日、横浜市の神奈川県民ホールで開かれた。17大学231チーム・834人が参加、本学からは参加大学の中で最多の64チーム・271人がエントリーし、5チームが最優秀賞、15チームが優秀賞を受賞した。表彰式後には、最優秀賞の代表によるプレゼンテーションが行われ、本学から商学部・渡辺達朗ゼミの倉橋さん、佐藤さん、高橋さん、根本さん、渡辺さん（斎藤さんは所用により欠席）のチームが、長期間にわたって取り組んできた活動の成果を発表した。

最優秀賞を受賞したチームと代表者のコメントは次の通り（敬称略）。

最優秀賞
5チームが受賞

商・渡辺達朗ゼミ

介護の新施設提案

倉橋由季代表、斎藤修司、佐藤かおり、高橋昌平、根本圭太、渡辺友理＝3年次

アルプス技研の「全く新しい介護福祉施設の企画提案」という課題に、デイサービスを軸とした新施設を提案しました。

高齢化について考え、介護の実態を調査。〝前向ケア〟をコンセプトに、「託児所」「交流広場」などを設置した高齢者と子供が楽しみながら介護予防できる施設を企画しました。企業の方に納得してもらうには、提案に具体性を持たせることが大切だと感じました。

表彰式でのプレゼンは緊張しましたが、ゼミでの経験を生かし、要点を伝えられたと思います。

経営・森本祥一ゼミ

ネットで試着購入

小池修平代表、千田桃子、安達早苗、野村尚平＝3年次

アイネットの課題「家庭における新たなるIT化」に取り組みました。何度もブレーンストーミングを重ね、IT化されていない鏡に着目。洋服をネットで購入する時に画面上で試着ができる、新たなネットショッピングを提案しました。

システムやビジネスモデルの構築、アンケート調査など、初めての体験で苦労しましたが、先生の指導のおかげで、自信を持ってプレゼンできました。代表として貢献できず、改めて仲間の大切さを知りました。そういった面でも得るものの多い活動でした。

経営・森本祥一ゼミ

企画の楽しさ味わう

河島妃奈子代表、得能靖子、松浦伊織＝3年次

京急システムズからの課題である「羽田空港～京急グループ各施設間の利用を促すサービス」について、プランを考えました。

プレゼンでは外国人旅行者を対象に電子端末を貸し出し、旅行者同士が情報を共有できる場の構築と、クーポン配信や地図機能などのサービス案を提案。ゼミで研究している情報技術を生かせるテーマでしたが、リスクマネジメントや損益計算などを行い、考えたアイデアを具体的にしていく作業が大変でした。

ゼロから自分たちで企画する楽しさや大変さを経験できました。

経営・矢澤清明ゼミ

ゼミの成果を発揮

白山冬輝代表、吉田洋平、才賀大彰、樽川博俊＝3年次

「他業種と提携した新しいスーパーマーケット」という京急ストアの課題を選択。民間企業のアンケート調査結果を基に顧客が食事を作る際のストレスを5つ挙げ、それらをスーパーが解決する「ソリューションスーパー」を提案しました。

ゼミで学んだ経営戦略を土台に具体案を検討。今まで得た知識を実践することで理解を深めることができました。まとめ切れない案が多く大変でしたが、全員が責任を持って取り組めたことで良いプランになったと思います。このような賞をいただけてうれしいです。

商・髙橋義仁ゼミ

考察力を生かす

三橋亮吾代表、清水世菜、鄭美子＝3年次

小田原周辺で食品スーパーを選ぶ消費者の心理を解析する「なぜ？あなたはその店で買い物をするの？」（関口商事）に取り組み、電光掲示板やコミュニティースペースを活用した高齢層をメーンターゲットとした店舗作りを提案しました。

アンケート調査の結果を基に考察を進めていきましたが、グループワークの難しさを感じました。しかし、調査の過程で、消費者が望んでいることや関心を持っていることを知ることができました。ゼミで培った考察する力や洞察力を生かすことができ、良い結果に結びついたと思います。

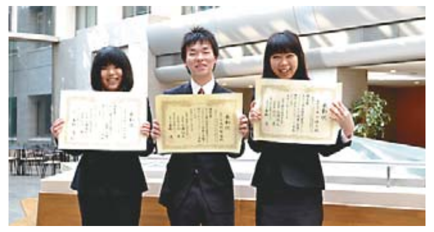
優秀賞
過去最多の15チーム受賞

商・石川和男ゼミ（佐藤翔太朗代表）

商・石川和男ゼミ（松下竜太郎代表）

経営・馬場杉夫ゼミ（小林亮介代表）

商・神原理ゼミ（西雄司代表）



経営・森本祥一ゼミ（浅野智隆代表）

商・神原理ゼミ（浅香健一代表）

経営・森本祥一ゼミ（今城彩代表）

商・神原理ゼミ（柴田吉幸代表）

経営・森本祥一ゼミ（大川泰裕代表）

商・渡辺達朗ゼミ（平松龍太代表）

経営・福原康司ゼミ（大谷優紀代表）

商・国田清志ゼミ（飯ヶ谷康太代表）

経営・間嶋崇ゼミ（荻原麻美代表）

商・山内暁ゼミ（川尻恭翔代表）

商・鹿住倫世ゼミ（藤野司代表）

活躍する卒業生を訪ねて

ゼミや課外活動など、本学での学びや交流が今の仕事にどう生かされたか、今後の抱負は——。さまざまな分野で活躍する卒業生3人に聞いた。

ゼミ、サークル、先輩
すべてが血肉になった

三宅・今井・池田法律事務所弁護士

相羽（あいば）　利昭（としあき）さん
（平2法）

会社再建・事業再生など倒産処理や企業法務を専門とする法律事務所に勤務して15年。中堅弁護士として多業種にわたる顧問相談や訴訟事件にかかわってきた。

同事務所創業者の故三宅省三弁護士から「これからの弁護士は専門分野を二つ以上持つことが必要。英語と共にアジアの言語も学べ」と言われ、07年米国に留学し、ニューヨーク州弁護士の資格を取得。米国の倒産法制や担保法制を学んだ。

今は中国語を勉強中。将来、発展途上国の法制度の基盤作りの仕事にかかわるのが夢だ。弁護士活動は「最新の情報を常に取り入れるアップツーデートの姿勢が大事」と語る。

家庭では2児の父。毎朝の保育園送りは欠かさない。「子どもと一緒にいることは大切なひととき。仕事への活力になっています」とほほ笑む。

出身は東京・足立区。実家は材木店を営んでいた。大学で法学部を志望したのは「学んだことが社会で役立つ『つぶしがきく学部』と思ったから」だ。テニスサークルに入り、学生生活を謳歌（おうか）する日々だった。

転機は2年次の時。父が腎不全で入院した。大学に通いながら家業を手伝うなかで「世の中には一生懸命働いても報われないことがある。そうした人を助ける仕事をしたい」と決意した。

猛勉強が始まった。勉学団体・正法会で学び、辰已法律研究所の少人数制のゼミ指導を受けた。司法試験合格者の先輩から親身なアドバイスや励ましを受け、卒業4年目で難関を突破した。

在学中、民事訴訟法の梅本吉彦ゼミで鍛えられた。「梅本先生の厳しい姿勢に接することができたのは、かけがえのない財産です」。

ゼミやサークル活動、たくさんの先輩たちとの出会い。その一つひとつが血となり肉となった。

「弁護士になれたのは、専修大学で学んだおかげ。専大は私の原点です」。

「勉強は娯楽だった」
単位も免許も多数取得

アサツーディ・ケイのプランナー

細川（ほそかわ）　連理（れんり）さん（平13文）

専大では文学部国文学科・日本語学コース（現・文学部日本語学科）に学んだ。

「勉強は楽しいものだと、大学に入って初めて気がつきました。決められた授業を受ける高校までと違い、大学は好きな分野の専門性の高い知識が得られるので、のめり込みました」

専大附属高在学時、カナダ・バンクーバーにロングホームステイ。「カナダの人たちが、自国の言語や文化を誇らしく紹介する」姿に感動。外国人に母国語を教えることに興味を持ち、ゼミは日本語教授を専門とする備前徹ゼミに所属した。

興味は日本語教育から日本語そのものへ。林義雄教授（現名誉教授）の中世、近世における日本語の特徴を解く授業は「パズルのような世界に引き込まれ」、一言たりとも聞き逃せず、びっしりノートを取り続けた。

長文のレポートや論文書きもいとわなかった。「自分の論じた解釈が、評価されて返ってくる。うれしかったですね」。

卒論は化粧品のネーミングについて。書き進めるうちに、ネーミングの歴史、音相、言語心理学……と研究する世界が果てしなく広がった。

卒業時には、学芸員、高校・中学一種教員、書道教員の免許を取得。「たくさんの単位と免許を取得し、一人でふたり分学んだ気分でした」。

「節操がないので、何にでもかかわれる仕事がしたかった」と広告代理店に入社。

アニメ版権業務、営業を経て現在は、IT部門に。本学オリジナルの携帯電話「きせかえ画面」配信の仕事で母校とかかわりを持った。所属した部署の行く先々で、大学時代の体験や得た資格が役立った。

美術展の企画には、学芸員の資格が。そして、菓子メーカーや化粧品メーカーを担当した営業部門での化粧品の新商品開発の際には、苦労して完成させた卒論での研究成果だ。「学生時代に培ったものがみな、今に生きています」。

世界70都市を飛ぶ
母校の活動が原点

カタール航空客室乗務員

角内（かくうち）　貴美（たかみ）さん
（平21経済）

アラビア半島東部に位置するカタールの首都ドーハを拠点に、世界100都市を結ぶ航空会社の客室乗務員として空を飛ぶ。既に世界70都市を巡った。

客室乗務員は小さいころからの夢。その実現のバックアップになったのが、専修大学での活動だった。

富山市の出身。経済学部国際経済学科に学び、留学を2回体験。韓国語が大好きで、2年次には韓国（檀国大学）へ短期留学。

さらに3年次には長期交換留学で米国（オレゴン大学）に渡った。留学に必要なTOEFLの得点を上げるため対策講座を受講。「毎日1時間、欠かさず勉強」の積み重ねで実力をつけた。

サークルは国際交流会「SHIPS」に入り、宿舎「国際研修館」を訪ね、さまざまな国からの留学生と交流した。彼らとの友情は現在も続いている。

「ソウル、パリ、マドリードなどフライトで訪れる都市で、再会するのが楽しみです」

大橋英夫ゼミでは、ディベートの力を養った。

また2年間HEIB講座を受講。ビジネスなどの多彩な分野の外部講師の話に耳を傾けた。

「専大は留学制度や支援講座が充実しています。それらを存分に利用したことが今につながっているのでは」と振り返る。

就職先をカタールに選んだのは「身に着けた英語を生かせる」と思ったから。英語が公用語の同国は、面積が秋田県とほぼ同じの小国ながら豊富な天然資源、中東の有力メディア「アルジャジーラ」を持ち、2022年にはサッカーワールドカップが開かれる。

ドーハに住んでまもなく2年。「仕事は肉体労働と同じ、時差の調整には毎回、苦しんでいます」。しかし、人との出会いと喜びは、すべてを超えるやりがいにつながっている。